

<別宮貞徳氏インタビュー>

よい翻訳のためには耳を澄まして書く

本稿は別宮貞徳氏に、直接上智大学で翻訳の教えを受けた一人を含む、上智大学に学んだ日本通訳学会会員が中心にまとめたインタビューである。

別宮貞徳：1927年東京生まれ。上智大学英文学科卒業。同大学院修士課程修了。元・上智大学文学部教授。翻訳家。幅広い知識を基に多岐にわたり活躍する。欠陥翻訳の問題に取り組んで大きな話題を呼んだ『誤訳迷訳 欠陥翻訳』のほか『さらば学校英語 実践翻訳の技術』『不思議の国のアリス』を英語で読む』『日本語のリズム』『翻訳読本』『「あそび」の哲学』『複眼思考のすすめ』『そこに音楽があった』など多数の著書があり、また『G.K.チェスタトン著作集』『インテレチュアルズ』『ルネサンス百科事典』『世界音楽文化図鑑』など多数の訳書がある。

1. 翻訳をするときに一番大事なことは

— まずお聞きしたいのですが、よい翻訳をするためには何が必要でしょうか。日ごろ翻訳をなさるうえで、一番大切にされていることは何でしょうか。

別宮：日本語力です。日本語が絶対ですね。極端な言い方かもしれませんが、日本語さえ書ければ英語を少々知らなくても平気です。本にも書きましたが、英語の意味がわからなくても、ネイティブや英語の達人に聞けばわかる。日本語は人に聞きようがない。自分の力しかない。

— ということは、日本語に訳す場合、日本語力がそもそも備わっていない人は、翻訳の勉強をしても仕方がないということになるでしょうか。

別宮：先天的な素質もあるけれど、日本語もやはり書く練習が必要でしょう。書いているうちに必ず上達していくものですから、はじめから素質がないといってあきらめることもない。

いまさら言うまでもないんですが、translateの本来の意味は「移す」ですね。で、翻訳の場合、何を移すかという、決して英語なら英語の単語を、意味の似通った日本語の単語に移しかえるんじゃない。英語を読んで、まずそこから周囲の状況、人物の心情を含めたイメージを作り上げる。そのイメージを、自分のことばで改めて表現する。つまり、イメージを日本語ということばの媒体に移しかえるわけ。これはすべての芸術について言えることでしょう。媒体がちがうだけで。ヴァレリーだったか、逆に、芸術はすべて翻訳だっ

て言っていますね。

自分の日本語である以上、十人十色で、その人の言語感覚、感性がものを言う。これは教えようがないんです。当人の **creative imagination** の所産だから。指導者としては、指針を与えて、その人の感性、**creativity** を引き出してやることしかできない。翻訳を教えるなんて、考えてみればほんと大それた仕事ですよ。まあ、ぼくが翻訳のクラスで一見よけいなことをあれこれしゃべっているのも、いま言ったような環境づくりに案外役立っているんじゃないかとは思いますが。ただし、翻訳という作業の前半の、どんなイメージを作り上げるか — これは英文理解にかかわる部分が多いから、かなりの程度教えることができますね。

もうひとつ大事なこと。イメージを自分のことばで表現する以上、ひとつひとつの語句の意味が辞書に出ている語義とはちがってくる、文の構造が文法書の説明からはずれていることは、あって当然です。ただ翻訳者は自分がどう感じたか、なぜこんなことばや表現をえらんだかを、ひとに説明できなければいけない。漫然と、無反省に、辞書と文法書だけをたよりに、英語を日本語に置きかえるのは絶対禁物です。わからないままおかしい文章を書くのは論外として。

2. 上智大学で翻訳指導をはじめたきっかけ

— ご著書『実践翻訳の技術』（ちくま学芸文庫、2006年12月）で拝見しましたが、先生は40数年前に上智大学で翻訳論の授業を始められましたね。翻訳や翻訳論の授業が開講されたのは、おそらく日本の大学で初めてだろう

とのこと。当時、上智大学で翻訳の指導を始められたきっかけは何でしょうか。

別宮：第一に翻訳が好きだったからです。学生時代から翻訳書をどんどん読みました。翻訳とはどういうものか、翻訳論なども多く読みました。それから上智大学の教員になり、入試面接で受験生に将来何をやりたいかと聞くと、翻訳という声はものすごく多かったです。それで、こんなに関心が高いのだったら、大学でも翻訳の授業をやってみようかと思ったのです。

— 40数年前に始めてみられたところ、押すな押すなの大盛況でびっくりした、と書いていらっしゃるんですね。

別宮：はじめは英文学科だけでしたが、そのうち外国語学部や教職課程にも広げました。

3. 教材はどう選ぶか

— 教材はどのように選んでいらっしゃるのでしょうか。私は、教職課程のために英文学科の授業をたまたま取らせていただきましたが、このときはGK.チェスタトンのエッセイなどを取り上げていらしたと記憶しています。

別宮：10行くらいの短い文章を集めた問題集があるでしょう。受験のための。それを使いました。でも、英文学科の翻訳演習の場合には、きちんとした本を選んでやっていました。英文科ですから、ずっと難しいものをね。

4. 大学とBECでの添削・評価

— 今、教師側に立ってみると、当時どのよ

うに教えていただいたのかを懐かしく思い出します。出された課題を家でやって提出し、先生がそれをご覧になって、授業で講評されるというやり方だったと思います。学生のなかでの優秀作品は、お手本として読み上げていただきました。当時は、ワープロさえまだなく手書きでした。添削してお返しいただいたようにも記憶しています。

別宮：最初は添削していましたが、あまり大変なので途中でやめました。だから、丁寧な添削ではなくて、間違えているところはアンダーラインを引いたり、言い換えたほうがいいところ、日本語としてあまりよくないところは破線を引いたりね。また、ところどころコメントを入れたりしていました。

— そのほかには、どんな指導方法が採られていたのでしょうか。

別宮：今やっている BEC (Bekku's English Translation Class) という私塾では、エッセイや紀行文、小説のテキスト 2 ページくらいを 2 名の受講生に割り当てます。これは上智でもやりましたけれどね。同じ箇所を二人が訳してきて、その両方をクラスで読み上げる。おかしいところを指摘し合い、学生の意見も聞いてにぎやかに討議しています。

BEC 翻訳教室は 1997 年に始めました。ここは学校ではありませんから、評価はしません。通ってきている人はさまざまですが、40 代以上が多いですね。

— 別名、ボケ防止エンタテイメントクラブと称していらっしゃいますね。(笑)

別宮：はい、最年長はぼくよりも年上の女性です。一番下でも 30 代です。大体は 40 代から 50 代の主婦です。皆さん、翻訳が楽しくて、面白いからやっていたらっしゃる。それと、自分で翻訳をして本を出すという希望をお持ちの方もずいぶんいます。25 人くらいのクラスのなかで実際に翻訳を出している方が 10 人以上います。

— 通われているのは、上智大学で先生の指導を受けられた方ですか？

別宮：上智でぼくの授業を取っていたのはだいたい前に一人だけいましたが今はゼロ。全員以前に他のところで教えていたときから継続して来ている人です。そして、たいへん示唆的だと思うんですが、大学で英語・英文を専攻した人は、25 人の中でほんの 5, 6 人ですよ。

5. 欠陥翻訳時評

— 翻訳に対する先生の情熱にはたいへんなものがあると感じます。そう感じるひとつに、昨年出版された『実況翻訳教室』があります。ベースは雑誌『英語青年』の連載で、1980 年から 85 年まで隔月 30 回、150 ワード程度の英文を課題として出題され、数十人から 100 人もの回答を批評されましたね。

それと、何よりも先生が「欠陥翻訳時評」を 30 年前、1978 年から 1998 年までの 20 年間、毎月執筆されていたことです。20 年間で 2000 冊近い翻訳書をチェックなさったそうですが、こういうことが出来るのは後にも先にも、先生以外いらっしゃらないのではないかと思います。

別宮：危ないところのある仕事ですから、みんな、やりたがらないですよ。ぼくが批判した本を出している出版社の編集者から、仕事を断られたこともあります。先生、どうもちよっと具合が悪いですよというわけですね。

— 日本の翻訳界は「別宮以前」と「別宮以後」にはっきりと分けられますね。「欠陥翻訳時評」のおかげで、レベルがぐっとあがったのは明らかです。現在、英米の文学作品の邦訳は世界的に見てかなり高いレベルにあると思いますが、そのような水準に達するために別宮先生の果たされた役割は本当に大きいですね。

別宮：そうであると嬉しいのですが。

— 別宮先生の功績をきちんと認識しなければいけないのでは、と思いますが、敵もたくさん作られたのではないですか。

別宮：味方もだいぶできましたが。

— 「欠陥翻訳時評」に対しては、世間からの風当たりも強かったそうですね。

別宮：ぼくに翻訳を取り上げられた偉い先生方から文句を言われることはありました。

— 感謝されることはありませんでしたか。

別宮：お礼を言われることはあまりなかった。「誤訳をして申し訳ありませんでした」というのはありました。ですが、大体はみな、知らん顔です。知らん顔って言っても、みんな怖がってはいましたね。翻訳家がね。

— 私はフランス語学科出身ですが、英仏の翻訳を比較すると、フランス語からの翻訳書にはまだ単純な誤訳が多いものもあります。別宮先生にフランス語の時評もやっていただきたいものです。

別宮：はじめに編集者から「欠陥翻訳時評」の話があったときは、英語だけではなくて他の言語もやってほしい、それに担当者もぼくだけではなくて、フランス語、ドイツ語その他の言語の専門家も入るはずだった。ところが、引き受け手がいませんでした。

— とても勇気がいることだと思います。それから、対象になる本を探すのに2000冊はご覧になったそうですね。膨大な数ですが、どうやってお選びになったのでしょうか。ご関心やご興味がおありの分野からですか。

別宮：苦手な経済はやはり少ないですが、科学...サイエンス関係など、幅広く取り上げました。

— そういえば、もともと別宮先生は理系でいらっしやいましたね。新しく出版されたものから選ぶようにされていたのでしょうか。

別宮：初めはそうでしたが、だんだんと古典や古くに訳されたものも取り上げました。新しく出された翻訳で適当なものを見つけるのが次第に難しくなったこともあって、古いものも見たところ、昔に訳されたものでもおかしい翻訳がかなりありました。

— 日本の翻訳点数は相当の数にのぼっていますが、実際に欠陥翻訳があるものを見つけるのにはかなりの労力が必要ですね。どうや

ってお探しになったのですか。

別宮：最初は自分で買ってきていましたが、そのうち訳者とタイトルをメモして編集部に取り寄せてもらうようにしました。一回につき、大体10冊くらい選びました。しかし、ちょっとした誤訳はどんな翻訳でもあることですから、そんなのはいちいち取り上げません。はっきりとした誤訳ね。それと日本語があまりにもひどいものです。日本語としてなっていない、読んで意味がわからないようなものは、翻訳として良くはないということです。

6. 日本語の文章として大切なことは

— 先生がご著書で繰り返し述べていらっしゃるのは、翻訳の良否判断の基準はつねに日本語として通用するかどうか、ですね。『実践翻訳の技術』でも書いていらっしゃる通り、良訳を目指すうえで日本語が書けるのは大事ですが、学生がきちんとした日本語を書けるようになるためには、どう指導すればよいのでしょうか。

別宮：自分でいろいろな本を読むこと。また、何か書く練習をすること。本を読んで感想を書く、日記を書くなど文章を書く方法はさまざまあるでしょう。

— 日本語をまずたくさん読むことが大切なのではないかと思います。

別宮：そうですねえ。

7. 演奏とのアナロジー

— 先生が訳されたセイヴァリーの『翻訳入

門』の1章に「演奏とのアナロジー」という章がありますが、翻訳は楽器の演奏と通じるものがあるのでしょうか。

別宮：表現をする上で大事なのは感性です。もちろん、技術的な問題もありますけれどね。感性は教えてすぐに身につくものではありませんから。感性を磨くのは、自分でやってみくしかないんじゃないかな。

— 先生はリズムについても書いていらっしゃるんですね。日本語の文章はリズムが大切と指摘されています。

別宮：もちろんリズムも大切な要素です。

— 翻訳の場合、リズムまで頭が回らないことが多いように思いますが。

別宮：自分で日本語の文章を書くときは、リズムなんて考えなくても、もって生まれた感覚で書いていけば、自然にリズムのある文章にいちおうなると思う。翻訳の場合、原文を日本語に置き換えているだけで、原文に引っ張られてしまう。原文を外してはいけない、ということばかりに神経が回ってしまうでしょう。

— 先生が指摘されているように、「こと」ばかりの「芋煮訳」、「の」ばかりの「のの花畑」という訳になりかねないのですね。

別宮：耳を澄まして書く、のが大切です。いまの翻訳技術のクラスは日本語に関する注意が多くなりますね。みなさん、英語そのものはけっこうできる人たちですから。日本語の文章のバランスがちょっと悪いとか、重複し

ているとか、書かれたものが一番問題になります。日本語、まあ、日本語に限らないけれど、結局、文章には用語、スタイル、リズム、この3つの要素がある。翻訳のクラスでのコメントも、結局はこの3つの要素が中心になります。

— 訳すときにどの訳を選ぶか迷ったときは、リズムで、語感で決める。声に出してみてもバランスのよいほうを選ぶ、ということになると思うのですね。

別宮：そうです。翻訳のときに自分の文章に無神経になることがあるんですよ。たとえば簡単な例ですが、女性の会話がある。その中に「しかし」なんていう言葉が出てくる。これ、絶対にあり得ないですよ。普段の会話で、女性は「しかし」なんて言葉、普通はまず使わない。

— 日本語として流れが自然であるか、その人の社会的背景や立場にふさわしい話し方をしているか、を検討する必要がありますね。

別宮：ただしこれは一般論です。まあ、あえてリズムを崩すような文章を書くこともありますよ。原文とのかねあいでもうせざるを得ない場合とかね。

8. 学校英文法の限界

— 先生は、誤訳の多発地帯として『実践翻訳教室』で、たとえばing形の訳出の間違いなどを指摘されています。ここで挙げていらっしゃるようなものは、学校英語でもっとちゃんと教えなくては、とおっしゃっていますね。

別宮：学校英語は型にはめてしまうところがあります。学校では、言葉の本質的なことを説明してくれればよいと思うのですが。たとえば“on”は「上」というより「接触」を意味することばだとか。こうしなくてはいけない、と型にはめて教える。これには受験勉強の弊害もあると思います。

そうはいつでも、翻訳が実際にできるようになる人は100人いて5人いるかどうか。別に英語を専攻したかどうかも関係ない。英語がよくできる人でも、翻訳をやらせると、おかしな日本語になる人がいます。それは、翻訳とはどういうものか、という認識が足りないからです。言葉をただ、移し変えればいいと思っている。クラスではまず翻訳とはそういうものではないことを教えます。その説明をした結果、ぐっと翻訳がうまくなった人もなかにはいます。翻訳と英文和訳は違うのだ、という認識がまず必要です。

9. 実務翻訳の基準

— 翻訳のクラスに出席されている方には、実務として翻訳の仕事につけるようになりたいからと言う人もいます。ピアニストの場合、コンサートピアニストではなくても、そこそこ弾けて、ピアノで仕事ができる場合があります。翻訳も本を出す翻訳家だけでなく、ほかで役立つこともあると思いますが。(注：ピアニストの仕事については花岡千春『ピアノを弾くということ。』でも言及されている。)

別宮：そうですね。翻訳家にならなくても企業で翻訳関係の仕事をする人はかなりいると思います。

— その場合でも、基準は日本語がわかりやすく、いい日本語であるということですか。そういえば、先生のたとえで、音痴に対応することばとして文痴、文章がわからないというたとえがありました。

別宮：耳で聞いていい文章になるように、というのが大事です。そのためには練習も必要です。練習がきちんとできるか。何でもそうですが、好きなら一生懸命にやる。あまり無理に練習ばかりしろと言うと、音楽もそうですが、たいていの人はいやになり、あまり勉強しなくなる。翻訳も楽しく感じるようになるまでが大変です。翻訳は時間が膨大に必要で、時間あたりの収入にしたら割りのいい仕事では決してないですから。

10. 翻訳の賞味期限

— 最近、一部の文学で「ラッシュ」といわれるくらい新訳が相次いでいます。訳しなおしの時期が来ていると言われていました。翻訳の寿命は20年という話もありますね。先生からご覧になって、訳しなおしてよくなった、と思われませんか。

別宮：いままで改訳されたものを見ていますと、新しいほうがいいと感ずることが多いです。

— 日本の場合、翻訳者の名前が必ず明記されるという意味では、翻訳者は大事にされていると言えますね。

別宮：外国では、たとえばフランス語から英語に翻訳するのは難しいことだという意識がない。だからあまり翻訳者が評価されない、

表には出ない、というのがあると思う。日本語の場合、言語構造が欧米の言葉とはまったく違うので、それなりに世間の評価を受けるんでしょう。

— あと、翻訳は業績になるということがありますね。たとえば典型的な輸入学問の場合、翻訳するとそれが業績になる。

ところで、翻訳者の文体があまりにも確立されていると何を訳しても同じになってしまうということがあります。この点については、どうお考えになりますか。たとえば、須賀敦子さんはナタリア・ギンズブルグを訳しても、タブッキを訳してもみな、須賀敦子の訳になってしまう。

別宮：それはそれで構わない、というよりもむしろ当然じゃないですか。翻訳者は自分の個性をまったく消さなくてはならないものではない。たとえばシェークスピアの翻訳。翻訳を読んだ人は、なるほどこれはシェークスピアだと思う。と同時に、これは翻訳者の文章だと思う。この両方があるべきじゃないかな。

— 先生は、「本当の翻訳とは、知性と感性のすべてを問われるアーティスト、広く知識を吸収し、美に親しみ、推理・分析・判断力を高めることが必要」とおっしゃっていますね。翻訳とは知性と感性が問われる仕事とされています。

別宮：それは当然のことで、翻訳という作業においても、翻訳者の知性と感性が反映されますね。たとえば、須賀敦子流や村上春樹流ってというのはそういうことでしょう。読者も

それをふまえて読めばいいのだと思う。

— ただ誰が演奏してもいい音楽の場合とは違い、翻訳は著作権の問題があって、ひとりの人が訳してしまうとほかの人が訳せない。タブッキの作品でも須賀敦子訳もあり、ほかの若い人の訳もあっていいと思いますが。

別宮：なるほど、そういうことはありますね。

— 著作権が切れたから、訳がたくさん出た『星の王子様』のような例もあります。経済学の本でも最近、新しい訳が出て話題になっているものがありますね。経済用語はこう訳す、と決まっているところがあって、わかりにくい用語でも経済学ではこう訳す、と定着しているような用語もあります。そういう意味では、型にはめていけば訳ができる。

別宮：まあ、専門用語は別としてね。経済の専門書ではないけど一般大衆向けの経済の本。本屋に出ている本でもそういう専門用語は別として、ひどいのが多かったですね。最初の頃の翻訳時評でもそういうものを取り上げました。そうしたら、大論争になってしまった。まいりましたね。

11. 翻訳家になるには海外経験が必要か

— 翻訳家になるためには、海外で生活した経験は必要でしょうか。翻訳家すべてが必ず外国で生活したわけではないと思いますが。

別宮：全然必要ないですね。ぼくも海外経験はありません。翻訳の95%は知らないことを扱うわけですから。翻訳する場合には、イメージーションが一番必要だと思います。翻訳

家は日本語を書く。英語で書くことよりも英語で書いてあることをイメージする、その力が必要です。著者が何を言いたいのか、そのバックグラウンドなども考えて、推理・分析・判断力を使って考えるということです。

『星の王子さまをフランス語で読む』という本を出されている加藤恭子先生（注：上智大学で長年フランス語の指導にあたった教員）がクラスで実践していることですが、授業で学生に「ここに書かれていることを動作で示してください」と言うと、学生にはできない。訳はできるけれど、実際に動作で示せというところまでできない。想像力がない、というか読解力が不足しているのでしょうか。

— おっしゃるとおりだと思います。上智大学を受ける学生、とりわけ帰国子女の人でも翻訳をしたいという人は大変多かった。ところが実際に翻訳者になる人は少ない。日本語での表現力が不足していたからなのかもしれません。

別宮：そうですねえ。

12. 翻訳をするには理論、言語学の知識は必要か

— 先生はセイヴァリーを1971年に訳されていて、そのまえにブロー編の監訳もおありです。また72年、73年にはナイダの翻訳論が（別の訳者によって）邦訳されています。このように日本でも70年代前半に翻訳論の息吹がありましたが、そのあといったん止まってしまいました。西洋で翻訳研究が盛んになった時期になぜ、日本ではなぜ同じ現象が起こらなかったのかとと思っているのですが。セイヴァ

リーを訳されたあと、先生は翻訳研究にご関心はお持ちになりませんでしたか。

別宮：ぼくはなんというか、職人になってね、理論は手がけていません。翻訳論についてあまり目を向けなくなりました。実際の翻訳の指導に向かったわけです。理論よりは実践、練習や実践を積み重ねることに対する志向性が強い、ということでしょう。

— 理論は役に立たないのでしょうか。

別宮：そういうことはないですが、学生時代に翻訳をやりたいと言ってくる人は、あまり学問としての翻訳、言語学や言語哲学、批評論に興味を持たないのですよ。それに言語学を知らなくても翻訳はできる。ただ、翻訳をするうえでごく基本的な心得は教えないとダメだと思います。それで、セイヴァリーの『翻訳入門』を説明したり、読ませたりしました。

— 理論と実践は分けたほうがよいのでしょうか。先生のお話は実践から出ているので、たいへんわかりやすく納得できるものだと思いますが。

別宮：分けたほうが良いと言うか、両方知っている必要はないと思います。授業では『翻訳入門』を一冊読んでもらえば、理論についてはあとはもう教えることはない。

13. さまざまな著作

— 今回、インタビューにおうかがいするにあたり、先生のご著書を数えてその多さにあらためて驚きました。著訳書が 170 冊近くお

あります。現在、200 近い大学に翻訳の授業があり、クラス数だと 500 以上になります。翻訳という名称が非常に魅力的だということは実証されたのではないのでしょうか。先生はそれをおそらく、日本で最初に認識され、大学で講義を始められた。しかもそのときお持ちだった翻訳に対する情熱が、形を変えながらずっと続いている。すばらしいことだと思います。

別宮：翻訳が好きだからでしょう。

— 日本語に対する思い入れは。

別宮：それはすごくあります。みなさんも日本語に関心はおありでしょうが、ぼくは日本語に関するクイズを集めた著作も出しているんですよ。クリスマスにパーティを開いて、そこでクイズを出したのがきっかけです。ぼくが出したいろいろな問題を見て、共同通信の編集者がそれを本にしましょう、ということですね。英語だけでなく、日本語、社会的な問題、それに数学もはいつています。かなり日本語に自信のある編集者もできなくてがっかりした、という本です。

【インタビュー後記】

別宮先生のお宅に伺った 2008 年 5 月のよく晴れた母の日の日曜日、お庭にはバラの花が美しく咲いていました。グランドピアノのある居間に通されて、美味しい紅茶とマカロンをいただきました。話は幅広い分野にわたりましたが、別宮先生の翻訳への情熱に触れさせていただきました。本音を語っていただけたのではないかと思います。もとは理系だった

先生の一面に触れた思いがしました。そういえば、BEC のクラスで最初に受講生が数学の問題をさせられて驚いた、という話もありました。こういう幅の広さは翻訳家に必要なのでは、と思います。

【聞き手】

日本通訳学会翻訳研究分科会有志（鶴田知佳子、北代美和子、長沼美香子、河原清志）

【書き起こしと編集・構成】 鶴田知佳子